宮城県行政評価委員会　政策評価部会
教育分科会（平成１８年度第３回）審議要旨

日　時　平成１８年７月２０日（木）14:30～17:00
場　所　県庁 18 階　1802 会議室

１　開会
２　議事
（１）施策評価の説明・質疑
政策２６　地域の誇りとなる文化・芸術の保存や振興の各施策
（２）政策評価の説明・質疑
政策２６　地域の誇りとなる文化・芸術の保存や振興
３　閉会

出席委員　水原克敏委員、宇田川一夫委員

１　開会
２　議事

政策２６　地域の誇りとなる文化・芸術の保存や振興

施策２　美術や演劇など文化・芸術活動に親しむための環境づくり
（生活文化課長から基本票により説明）
（水原委員）
・基本票 9 ページの事業分析カードで見ると，平成 17 年度は平成 16 年度と比較して事業費が約 2/3 程度に減額されているが，主催事業会場数は逆に増加している。予算減額に対してはどのような策を講じたのか。
（生活・文化課）
・「みやぎ県民文化創造の祭典開催事業」については，事業を開始した平成 9 年度は予算額 70,000 千円でスタートして，徐々に予算は減額されてきた。平成 17 年度に至っては，県財政の状況を反映したシーリングの関係で 23,525 千円まで減額となった。しかし，平成 16 年に文化芸術振興条例が制定され，これを受けて昨年度は文化芸術振興ビジョンが策定されるなど，文化芸術振興には本腰を入れたいと言う考えもあり，平成 18 年度についても主催事業の開催回数を減らすことなく何とか対応しているところである。
・審議と直接の関係はないが，仙台フィルハーモニーの運営費用についても，平成 18 年度初めて減額措置されるなど，予算的には非常に厳しい状況にある。

（水原委員）

・政策評価指標の目標設定について，右肩上がりとしていることで無理がたたってくることはないか。

（生活・文化課）

・施策の評価では，指標値の伸びと，県民満足度調査の重視度満足度のかい離の度合いとの両面から検討していく必要があるかと思う。

・また，現在設定している政策評価指標については，右肩上がりに順調に数字を伸ばせるかと言う問題と，文化芸術の振興を測る指標として適切であるかどうかと言う問題を併せて検討しながら修正の必要もあるかと考えている。

・指標の現況値としてカウントしている中には，芸術銀河の参加者のみでなく，県立文化施設の年間入場者数を含んでいる。

（水原委員）

・政策評価指標設定については，後ほど施策 3 の審議の時にまとめて議論することとしたい。

（宇田川委員）

・政策評価指標の現況値には，県図書館の利用者の数も含まれているのか。

（生活・文化課）

・含まれており，割合としては図書館利用者数が最も多くなっている。平成 17 年度の現況値 1,857 千人のうち, 芸術銀河への参加者数が約 940 千人, 県立文化施設への入場者数が約 916 千人である。県立文化施設の入場者数の内訳は，県図書館 578 千人，県美術館 165 千人，歴史博物館 87 千人，石巻サンファン館 77 千人。なお，県美術館については教育普及事業での入場者を含むと年間 200 千人～250 千人である。

（水原委員）

・現況値の伸び悩みの原因となっているのがどの部分かということは把握しているのか。

（生活・文化課）

・平成 17 年度，予算の減額はあったが，芸術銀河は参加者数 940 千人，会場数は 63 箇所と増加している。特に，音楽アウトリーチ・プログラム（学校，病院，福祉施設等への出前クラシックコンサート）の会場数が増加しつつある。県予算は減額されているが，国レベルの公益法人である地域創造，各市町村など，様々な機関との役割分担で何とか運営している。小さくとも良質な文化芸術に触れていただく機会を増やしたいと考えている。

・地域により施設が充実している，いないの違いもありなかなか難しい点もある。

（水原委員）

・目標値を達成することだけを目的に，人が集まるようなイベントを行うようになってしまえば本末転倒である。右肩上がりの目標値が設定でき，かつ，県が努力することによりその数値を伸ばしていける指標が理想だが。

（生活・文化課）

・音楽アウトリーチ・プログラムは非常に好評であり，今後も拡大していきたい。

（水原委員）

・そう言う意味では，イベント開催件数だけでなく，県民の満足度の推移も見ていく必要があるのだろう。

（生活・文化課）

・「クラシック」と言うだけで敬遠するような向きもあるが，その垣根を下げるための取り組みを地道に行いたいと考えている。

また，子どもが聴きたいと言えば，家族みんなでクラッシックに親しもうということにつながるのではないかと期待している部分もある。

（水原委員）

・今年はモーツァルトなどの社会的なブームによって助けられている面もあるのではないか。

（生活・文化課）

・思わぬ要因で助けられた面はあるかも知れない。

（水原委員）

・県予算の減額が，チケット代金の値上げなどにより，県民の負担という形で転嫁されたりはしていないのか。

（生活・文化課）

・使用するホールやアーティストの違いで入場料金は様々であるが，県民の負担増は生じないように運営されている。

（水原委員）

・民間のコンサート等イベント運営であると，収益性の問題が大きいが，予算が 2/3 に減額された中で同レベルの事業を行っているということを，どのように評価すればよいのか。評価の視点として使えるモノサシはないのか。

（生活・文化課）

・県内には 44 カ所のホールがあるが，それらホールの課題は催事の企画立案力である。県民のニーズに応えるためにも，単にコンサートをすれば良いと言うことではないと考えている。収益がマイナスという事例は余り聞いたことがないが，面白みのあるイベントの開催という意味でも企画立案力という点が問題となる。指定管理者制度がスタートしたこともあり，他施設との競争力も必要となってきていると考えている。

（水原委員）

・企画立案力と言った場合，若い人々にメンバーに入ってもらい，意見を述べてもらうと言う取り組みも必要ではないか。施設内部の者の知恵だけで進めようとしても限界があるのではないか。

（生活・文化課）

・文化芸術振興条例に基づくビジョンが昨年度策定され，そのスタート年度は今年度となっている。そのため，今年度は，全県各地域を歩き，さまざまな方の意見を聴き，今後の事業計画に反映させていくことを想定している。

施策３　県民が行う創作活動や表現活動への支援

（生活文化課長から基本票により説明）

（水原委員）

・基本票 15 ページを見ると，こちらは平成 17 年度も前年並みの予算が確保できたということか。

（生活・文化課）

・そのとおりである。

（水原委員）

・指標について，県民に「親しんでもらう，観てもらう，聴いてもらう」ことを主たる目的としている施策２と同一の指標としているが，施策３は目的からしても，主体的に自ら文化芸術活動に取り組んでいる人の人数などを指標とするのが望ましいのでは。

（生活・文化課）

・基本票 15 ページの事業費は，県芸術協会と県文化協会に対して，毎年度ほぼ同額の助成を行っている，その金額である。それにより，芸術銀河に主体的に参加してもらい，波及的な効果をねらうと言うシナリオで行っている。

・指標の問題については，委員御指摘の点については認識しているが，現在の所同一の指標を用いて評価している。

（水原委員）

・既成団体への助成金ということだが，何か今までにない新しい活動をしたいと考える人に支援する方策はとれないものか。

（生活・文化課）

・財団法人宮城県文化振興財団に対しては，県の予算から，今年度からの県民会館の指定管理者制度導入に伴う委託費のほか，特別助成金の名目で，県民のサークル活動への支援助成費を支出している。財団では年間 13,000 千円程度の予算で，内容審査等を経て 1 サークル当たり 5 万円の助成を行っており，かなりの数のサークルに助成している。また，単年度でなく，継続的支援も可能なシステムとしている。

（水原委員）

・県からの直接補助ではなく，財団を通じての間接補助のため，基本票には見えてこないと言うことなのであろうが，記載内容からは，新しい文化芸術の動きへの支援が何もなされていないように受け取られる。今説明のあったような県民への文化芸術活動への支援の状況についても示されていれば，県の取組内容がもっと見えるようになる。

（生活・文化課）

・芸術銀河の中に「みやぎ発信劇場」という事業があり，芸術銀河の際に共催の形をとって，住民参加型劇団に登米祝祭劇場，えずこホール等公共ホールでの公演をしていただいている例はある。

（水原委員）

・新しい文化芸術の取り組みを行う団体数, 活動人数などが示されれば分かりやすいと思うのだが, 県が文化振興財団に支出している分は目に見えない。指定管理者制度の導入で，土日・夜間等の時間の融通がきくなどメリットとなる部分もあるが，ますます目に見えなくなっていってしまう部分もある。

（水原委員）

・県民の文化のすそ野を広げる，層の厚みを増していく手だてと言うのが，予算的な限定はあるにしても，芸術祭に限定せざるを得ないのかという（疑問はある。）

（宇田川委員）

・違った目的を持つ施策２と施策３に，同一の指標を設定しているというのはやはり問題がある。施策が異なるのであれば別な指標を設定すべきであり，指標そのものの妥当性が疑われることにもつながってしまう。広い範囲で意味づけをすれば同じ指標でも良いのかも知れないが，施策 2 は入場者数，施策 3 であれば参加者数をとるのが妥当だとは思う。事業に対する参加者数というのが数

値で捉えられるかどうかということはあるが，いずれより良い指標を考える必要があるだろう。
（生活・文化課）
・基本票について説明しながらも，「これで良いのか」という疑問は確かに持っている。県立文化施設への入場者までをカウントして良いのかと言った点もやはり気にはなっている。

（宇田川委員）
・横の連絡ということになるだろうが，政策 23 の施策 1「多様なニーズに対応した学習機会の提供」では，「県民一人当たりの公立図書館における図書資料貸出数」を指標としているが，県図書館への入場者数等についてはカウントしていない。その点，貸出冊数と入場者数の相関などを見る上で，本来は政策 23 でも県図書館への入場者数は重要なデータとなるはずである。
（生活・文化課）
・施策 3 の指標の検討の際に，今いただいた御意見についても併せて検討したいと思う。

施策４　食文化等の生活文化の保存・継承・活用
（生活文化課長から基本票により説明）
（水原委員）
・施策の県民満足度が 55 点，県民の評価はそれほど低くない。分かりやすい取り組みであるためなのか。事業が終了と言うのは惜しい気もする。観念的な事業とは違って，県民自ら嬉々として参加しているように見える。
（生活・文化課）
・地域の，特に女性の方々が主体的に参加いただけた事業であったと思う。
（水原委員）
・ただ集まっても駄目で，みんなで一緒に食べられる，しかも子どもも健康になれるからと言った点で支持されたのではないか。
（生活・文化課）
・平成 17 年度には，平成 14～16 年度までの 3 年間の取り組みの成果を冊子として取りまとめ，5 万部作成し全県下に配布している。このほか，旧宮崎町では結城登美雄氏にアドバイスを受けながら，町独自のパンフレットを取りまとめている。

（水原委員）
・ようやく「食育」の重要性が認知され，県教委でも「早寝・早起き・朝ごはん」というキャッチフレーズで，生活のリズムを作ることで成績向上につなげようという取り組みを始めるなど，食育の基本に戻ろうということでやっている。これまでの積み重ねを花も実もあるようにつなげたいところである。
（生活・文化課）
・保健福祉部健康対策課には，食育の里づくり事業での活動途中で得られた成果などを渡しており，それらの取り組みも踏まえて食育基本計画を策定する予定と聞いている。
・余談ではあるが，食育の里づくり事業で誤解を持って捉えられてしまったのは，ファーストフードは駄目なのかという点。災害の発生時などはファーストフードの需要もあり，決して否定してはいない。今は総菜等の中食も様々得られるようになっており，豊かな社会となった証拠でもあり結

構なことだと考えている。しかし，本事業はそのような観点とは別に，生産・消費・会話と言った循環を通して何か出来るのではないか，という点に着目し実施してきた事業であり，有効な事業であったと考えている。

（水原委員）

・災害が発生した場合にも，常日頃から「ものの食べ方」を訓練等で学んでいれば安心だと思うのだが。

（生活・文化課）

・料理の道具などは別として，祖父母がいる，いないなどの環境の違いで生活の知恵とでも言うようなものを得られるかどうかも異なってくると思う。都市部では家庭構成等からしてもなかなか難しいが。

（水原委員）

・各地域で，年に 1 回でも「炊き出し」のような行事があれば子どもの生きる力もつくと思うのだが。健康対策課で行うのか，防災担当課が行うのかといった問題はあるが。ここまでつないできたものをさらにつなげていって欲しい。

（水原委員）

・学校現場では，食育を担当する「栄養教諭」という位置付けの教師も配置されるようになってきている。

（水原委員）

・政策 26 全体にも関わることだが，団塊の世代がこれから大量退職を迎えることになる。食育の観点から見て，この世代の男性向けの料理教室の開催など，食の面でいかに自立させるかというのも重要ではないか。「誰かに作ってもらわなければ食べられない」のではなく，「自分の食事は自分で作る」ということで，生活の可能性を広げるというのは大切だと思う。

（生活・文化課）

・そのような視点での取り組みというのも確かに考えられる。

（宇田川委員）

・基本票 23 ページの指標について，取り組んでいる「市町村数」となっているが，学校でも社会人講師を招いての授業などが増加しており，そちらの取り組み内容の情報等を収集すれば，実態としては食育に関する取り組みはもっと浸透しているのではないか。横の連絡と言うことで数字を見ていけば，もっと比率は高くなると思う。必ずしも食育の里事業の対象となった市町村数だけをカウントする必要はなく，学校等からの情報収集の結果，かなり食育に関する取り組みが浸透しているということになれば，この指標が妥当であるかどうかという議論にもなってくる。

（水原委員）

・ある程度モデルとなるケースを示して，それに該当する取り組みはカウントしていくということでも良いと思う。事業を行う目的は，モデルケースを呈示しそれを周辺地域に波及させていくことであると考えれば，事業対象となった市町村をカウントしていれば良いと言うことではないのではないか。

（生活・文化課）

・かなり前になるが，県で「みやぎの食文化」という冊子を取りまとめており，全県での食文化の広がりは概ね把握はできている。

（生涯学習課）

・生涯学習課では，公民館の事業活動の調査を毎年度行っているが，食に関する取り組みはかなり幅広く行われていることが明らかになっている。

（水原委員）

・教育委員会では地域と学校の連携プランが進められており，こちらの事業では食育を通じて学校・地域・家庭の関係を再構築しようということであれば，ぜひ協力関係を持って強力に進めて欲しい。各地域で行われている「点」の取り組みを「線」に結ぶ取り組みを県では行って欲しい。

（宇田川委員）

・宮城大学にも食産業学部が設置され，そちらとの連携も考えられるのではないか。

政策全体　地域の誇りとなる文化・芸術の保存や振興

（生活文化課長から基本票により説明）

（水原委員）

・施策 2，施策 3 の指標設定の問題については先ほど申し上げたとおりである。

・先ほど食育のところでも申し上げたが，団塊の世代の大量退職により生じてくる人々が，地域社会でも自立した生活ができるようにしていく取り組みも必要ではないか。多少金がかかっても，文化的取り組みとして，自分の絵の展覧会を開催したいと言った人も出てくるかも知れない。そう言った場合に，個にとどまらず，「子ども」や「地域」をキーワードに広く文化的活動を企画してもらい，そのような場合には県も支援するという方法も考えられる。ぜひそのような事業を実現して欲しい。

（水原委員）

・指標の目標値の設定について，ほとんどの場合がそうなっているが，常に右肩上がりというのは実際大変だと思う。

（生活・文化課）

・横ばいや右肩下がりの目標値の設定には勇気がいる。しかし，常に右肩上がりでは，極端に言えば青天井となってしまう。

（水原委員）

・本来であれば，設定された目標値が全国レベル，世界レベルなどの比較すべき対象に対してどうかと言った根拠が欲しいところだ。

3　閉会

宮城県行政評価委員会政策評価部会

委員　水　原　克　敏

委員　宇田川　一　夫